

武蔵野日曜聖書講筵

キリスト讃美

――詩篇第23篇――

1996年5月26日

小池辰雄

聖名のゆえ 神・キリスト本位 エン・クリスト 霊人 詩「わが主キリストは」 詩「きつねに穴ぐらあり」 詩「汝れわがうちに」

【詩篇23】ダビデのうた

- 1 エホバはわが牧者なり、われ^{とも}乏しきことあらじ。
- 2 エホバは我をみどりの野にふさせ、いこいの水濱^{みぎわ}にともないたもう。
- 3 エホバはわが^{たましひ}靈魂をいかし、名^{みな}のゆえをもて我をただしき路^{みち}にみちびき給う。
- 4 たといわれ死のかげの谷をあゆむとも禍害^{わざわい}をおそれじ。なんじ我とともに在^{いま}せばなり。なんじの筭^{しもと}なんじの杖われを慰む。
- 5 なんじわが仇^{あた}のまえに我がために^{えん}筵をもうけ、わが首^{こうべ}にあぶらをそそぎたもう。わが酒杯^{さかずき}はあふるるなり。
- 6 わが世にあらん限りはかならず恩恵^{めぐみ}と憐憫^{あわれみ}とわれにそいきたらん。我はとこしえにエホバの宮にすまん。

●聖名のゆえ

キリストの御霊と御言に圧倒されてやってきました。詩篇23篇をちよつと開いていただきます。

- 1 エホバはわが牧者なり、われ^{とも}乏しきことあらじ。
- 2 エホバは我をみどりの野にふさせ、いこいの水濱^{みぎわ}にともないたもう。
- 3 エホバはわが^{たましひ}靈魂をいかし、名^{みな}のゆえをもて我をただしき路^{みち}にみちびき給う。

「名^{みな}のゆえをもて」という言い方が非常に大事なわけです。こつちのことではないんだ、
「聖名^{みな}のゆえをもて」なんです。

- 4 たといわれ死のかげの谷をあゆむとも禍害^{わざわい}をおそれじ。なんじ我とともに在^{いま}せばなり。なんじの筭^{しもと}なんじの杖われを慰む。



力強い言葉ですね。23篇というのは短いけれども、素晴らしい詩篇です。これは「人生の歌」と藤井武先生がいつか書いていましたが、全くそうです。

なんじの答しもとなんじの杖われを慰む。

「答」というのは、敵を防ぐ。「杖」とは、こちらの歩むときの守りです。

⁵なんじわが仇あたのまえに我がために筵えんをもうけ、わが首こうべにあぶらをそそぎたもう。

新約的にいうなら、

「わが首こうべに聖霊をそそぎたもう」

ということです。

わが酒杯さかずきはあふるるなり。

我という「酒杯」は溢れる。

⁶わが世にあらん限りはかならず恩恵めぐみと憐憫あわれみとわれにそいきたらん。我はとこしえにエホバの宮にすまん。

「そいきたらん」ではなくて、「そいきたる」です。また、

「我はとこしえにエホバの宮にすまん」

ではなくて、

「我はとこしえにエホバの宮なり」

です。

「自分は永遠に神さまの活ける宮である」

と、そういうように読んでいきたいと思えます。これはコリント前書3章16節をみると、

「¹⁶汝ら知らずや、汝らは神の宮にして神の御霊みたまなんじらの中に住み給うを。」

¹⁷人もし神の宮を毀こぼたば神かれを毀ち給わん。それ神の宮は聖なり、汝らも

亦かくの如し。」(コリント前3・16〜17)

「我々は神の活ける宮である」

という。大事な言葉ですね。

●神・キリスト本位

我々が守られるのもみな

「神の聖名のゆえ」

である。神の栄光を証しするところの存在である。どこまでも神・キリスト本位なんです。我々の救いのためではない。

「神・キリストの聖名のために、聖名のゆえに」

ということ。それが我々の、結果としては、福音になるんです。そういう神・キリスト本位ということ。我々の存在は神・キリストの栄光が現れるためです。こつちのためではない。



こっちの救いではない。これがはつきりしていると、非常に楽だし、本当の力が来るし、自己本位でなくなる。

神・キリスト本位です。それが結果として、我々の福音になる。救いのためではない。

「我々の信仰のいかんによる」

とかいうことではない。キリストという方がそういう方です。イエスというひとは神本位、神一切のひとなんだ。父を讃美している。だから、

「神・キリスト讃美」

です。我々の生活が讃美歌なんだ。

「讃美歌的生活」

なんだ。環境がどんな具合になろうが、運命がどうなろうが、一向差し支えない。それが棄身ということ。本当の棄身とはそういうことです。自己犠牲です。そうすると、その棄身の在り方が神讃美である。神さまは棄身の人間を必ず天界の大事な存在になさってください。目的はこの世にない。霊界にある。

まあ、地上では、いくら長くても百歳くらいでおしまいだからね。モーセは120歳か、アブラハムは175歳か。そんなことを数えたつてしょうがない。永遠です、永遠の生命です。大事なことは

「神・キリスト本位」

ということ。ダンテの『神曲』を読むと、「地獄・煉獄・天国」の、その天国にいくと、本当に神讃美の群です。あの天国篇のおしまいの方は素晴らしい。

⁶ わが世にあらん限りはかならず恩恵と憐憫とわれにそいきたらん。我はと

こしえにエホバの宮にすまん。

「我は永遠にエホバの宮でありたい」

ということ。活ける宮である。詩篇23篇というのは全詩篇の圧縮された中心みたいなところ。これはたった六節だけれども、素晴らしいね。

「エホバ」というのは本当は

「ヤーヴェー」

というんです。

「実存しているもの、実際に存在するもの」

という意味です。

とにかく、日本人の大方は聖書を読んでいないからね。あなた方はみな選びの器です。若い人には、

「とにかく聖書を読め」

と薦めてください。特に詩篇と新約の福音書です。素晴らしいね、聖書という本はあきないですよ。



●エン・クリスト

「なんじわれと共に」

「なんじ我がうちに、われ汝のうちに」

と。とにかく、

「クリストと一つ」

でなければダメです。「信ずる」ではなくて、一つの存在ということです。

「われがクリストか、クリストがわれか」

という、我とクリストが一つなんです。正に、

「クリストの中に」（エン・クリスト）

「イン・クライスト」です。「…を信じている」ではない。「…の中にある」ということ。

「私はクリスト教なんか信じていませんよ。私はクリストの中にいるだけのはなしですよ」

と、あなた方ははつきり言っている。

「信仰なんかありません」

と言うと、

「何ですか、クリスチャンなのに信仰がないんですか」

「そうですよ、信仰なんてありません。信じ仰いでなんかいません。私はクリスト

の中にいますよ」

と言うと、相手がびつくする。

朝起きるとき、あるいは夜寝るときに、お腹の中で無言の叫びをもって

「主さま！」

と言えば、もう直ちにクリストと一つです。祈りは、祈りの内容なんか知らない。「主さま！」だけでいい。

「主さま！ ありがとうございます。今日も一日中、あなたの御力でやらせてくださいます」

と。何をやるのでも、そういうことですね。これが宗教的な神秘の世界です。

私が育った無教会では「神秘」という言葉は嫌いだっただけだ。

「信仰、信仰」

と一生懸命で言っていた、

「神秘はあやしい」

なんて。あやしくはないよ、これは一番大事なんだ。無教会は「自分たちの信仰」というものをよしとしていた。私は

「信仰なんかありません。クリストに圧倒されているだけのはなしです。クリストの中に入られているだけのはなしです」



と言う。これが我々の現実です。私たちは地上にいても、もう既に天国人ですよ。

「汝われと共に、汝わがうちに」

ということ。旧約では「共に」という言葉がかなり出ている。ところが、新約では「うちに」の世界なんです。新約は内在関係的なんです。旧約は共在関係的です。友人関係でも、本当の交友というものは、

「君が我が、我が君か」

というような、

「友のために生命を捨てる、これより大なる愛はなし」

という、そういった関係です。エレミヤ記1章19節に、

「彼等なんじと戦わんとするも汝に勝たざるべし。そはわれ汝とともにありて

汝をすくうべければなりと、エホバいたまえり。」(エレミヤ1・19)

「われ汝とともにありて」とあるけれども、「汝のうちに」とは書いてない。

「汝のうちにありて力となればなり」

なんて書いてある旧約はないんだよ。

●霊人

我々は神秘人であり、霊人である。福音書を読んでいると、キリストは正に霊人だ。霊のひとだから、もの凄い力を持っているから、

「ラザロよ、出できたれ！」

たとえば、死人が甦って出てくる。棺桶にキリストが手をおけば、死人が甦ったのだから、これは大変なもんだな。湖の上を渡ってきたりね、これは普通は考えられない。キリストのまねをしたらだめですよ。まねする必要はないけれども、そういう霊的な次元に自分を入れていると、時に不思議なことが起きるわけです。

お医者さんの薬よりもキリストの霊の力の方が凄い。なにもお医者さんの薬を、私はけなすわけではないけれども、それは第二次的なものです。第一次的なものはキリストの生命、キリストの光です。そういうことで進んでいきましょう。

人間は、国際関係でもすぐ戦争をしてみたり、全くしょうがないものだ。生まれつきの人間というのは救いがたきものだね。

●詩「わが主キリストは」

召団讃美歌を二、三、歌います。

召団讃美歌A7「わが主キリストは」

(1979年12月27日作、讃美歌239「さまよう人々」の曲で)

1 わが主キリストは

わが牧人^{まきびと}



若草の野辺に
憩いの水汀に
これこそ聖国の
さつきの詩篇23篇です。

2 たとい死の陰の
われにおそれなし
共に在し給う
汝がみ霊こそは
これは大事な言葉です。

3 わが主はわがため
み霊の油を
敵をも愛する
聖霊より出づる
仇敵の前に
そそぎ給う
心こそは
力なれや

キリストが「敵を愛せよ」と言われたね。敵が参つてしまう。
4 恩恵と真理は
われらの中にぞ
これぞ永遠の
われらは聖霊の
聖霊なれば
入り来たれる
いのちなれば
幕屋たれや

●詩「きつねに穴ぐらあり」

召団讃歌A8「きつねに穴ぐらあり」

(1980年1月15日、讃美歌39「日くれて四方はくらく」の曲で)

1 きつねに穴ぐらあり
小鳥には塹あり
人の子枕するに
宿るべきところなし
2 山ゆかば石枕
野べにては草枕
主はかくぞ眠りける
父のふところとして
3 小舟は木の葉の如
波風にゆらぐとも
舟板を枕とし
キリストは眠りけり



そうだったね、キリストは。弟子どもは「沈むから危ない」と騒いだけれども、キリストは眠っておられた。「なんでお前たちは恐れるか」と言われた。

4 あらしをいたくおそれ

弟子どもは主を起こす

起きざまに主は言えり

5 「何ぞおそれまじつや」

舳に主は起ちてぞ

叫びける「風黙せ！」

あらしは屈きとなれり

ああみ霊のキリストよ！

キリストが波にむかつて「黙せ！」と言われたら、静かになってしまった。

6 憂いに沈むときも

病氣になやむときも

キリストのふところに

眠りてみ力を得ん！

そういう讃美歌です。これは私がキリストの言葉に即して作った讃美です。こういう讃美歌は普通の讃美歌にはない。

●詩「汝れわがうちに」

A 10 「汝れわが衷に」

(1980年2月7日作、讃美歌48「静けき夕の調べによせて」の曲で)

1 「汝れ我が衷に」しかと宿らば

祈り求めよ さらば成るべし

2 み父のわれを愛する如く

汝を愛す わが愛に居れ」

3 キリストのため生命を賭けて

人を愛せん み霊は助く

4 「汝れは愛なり 愛の炎ぞ！

聖霊の愛を 貫き生きよ」

これは聖霊の愛による歌ですね。聖霊の愛ということ。時々、こういう歌を歌ってみてください。とにかく、人生は讃美歌を歌いながら歩くといい。どんなことがあっても神讃美、キリスト讃美です。そうすると、その環境や運命に打ち勝っていく。そういう意味で讃美歌というものは大事なものだ。「歌いつつ歩まん」という聖歌もあるね。

